

## 被爆者の祈念への贈与

—— 加藤典洋による『「反核」異論』への応答

加島 正浩

### 一、東日本大震災後の、吉本隆明の原発観への支持

吉本隆明『「反核」異論』の内容は大別すれば、文学者の反核運動への異論と、運動などで主張される反核・反原発理念への批判に分けられると思われるが、本稿では東日本大震災後に『「反核」異論』を読み直すという立場から、後者の吉本の反核・反原発理念への批判を再考することを目的としたい。

まず、東日本大震災後にみられる吉本の反核異論に肯定的な態度を示す言説を取り上げ、その内容に呼応する吉本の主張を確認したい。ひとつは、現実には不可能な核廃絶という理念を掲げることは虚偽に満ちており、「倫理的な退廃」であるというものである。たとえば、瀬尾育生は以下のように述べる。

八〇年代初めの反核運動に対してわれわれが異議を申し立てたとき、吉本さんの『「反核」異論』が代表的ですが、そこでは原理的にありえない、という共通理解だったと思う。あと冷戦下の当時の政治情勢の認識とか文学と政治の問題とかいろいろ派生した問題がありますが、すべての前提にあったのは、核「廃絶」というのはありえない理念だ、架空の、あえていえば虚偽の理念だ、そういう理念から普遍的な倫理を作り出すのは誤りだ、ということだったと思う。それが今回、核兵器ではなく、原発の問題としてそれがあらわれてくると、段階的にはあれ、その「廃絶」が語られはじめた。しかもそれを動機つけているのが、ある倫理的な負荷のようなものだと感じられる。このことに、ぼくはとても戸惑う。<sup>①</sup>

瀬尾は八〇年代はじめの吉本を中心とする反核運動への批判の前提には、核の「廃絶」というのはありえない「虚偽」の理念であり、そこから「普遍的な倫理」を作り出すのは誤りという考え方があったとする。そして上述した前提を、震災後に語られた原発廃絶の理念へも敷衍し、それは「倫理的な負荷」であるとし、「このことに、ぼくはとても戸惑う」と述べている。ここで確認する必要があるのは、瀬尾が述べる内容が吉本の『「反核」異論』にどのように記されているのか、であろう。吉本は「停滞論」で以下のように述べている。

現在米ソ両国はどちらも膨大な核爆弾、ミサイル、その他の兵器、軍需物資の生産を停止すれば、すぐに経済社会的な側面から国家の崩壊に直面するだろう。これは専門の経済学者の見解である。誰が一個の「人間性」としてそれは望まぬものがある。この両国が兵器生産を放棄し、一方は平和な力ウ・ボーイの国に、他の一方は半アジア的な平和なミール共同体の国にもどってくれたら、世界はこれにならうことになり、住みよくなるにきまつている。だがわたしたちは、冗談をいいたいのではない。(中略)現在の段階で、かれら米ソ両国が国家の崩壊を賭けてまで、核をはじめとする兵器、軍需生産をやめるなどと到底かんがえられないからである。②

一個の「人間性」として、核の廃絶を望むのは当然であるが、経済的な見地からいって、アメリカやソ連が核兵器や軍需生産をやめるとは考えられないというのが吉本の主張である。そして、

そこから「誰からも非難されることもない場所」で『地球そのものの破滅』などを憂慮してみせることが、倫理的な言語の仮面をかぶった退廃、かぎりない停滞以外の何ものでもないことを明言しておきたい<sup>③</sup>という発言もなされている。ここで吉本が批判しているのは、誰からも非難されることがない「正しい」主張を現性を考慮することなく、ただ主張しているという点にもとめられ、そこで抜け落ちていく考えが経済的側面からの考察ということになるだろう。

そしてもうひとつは、吉本が核エネルギーの解放に世界の根本を理解するための本質があると捉えていたとして、吉本の考えに賛同するものである。たとえば、大井浩一は一九八〇年代以降、特に九〇年代以降の吉本の思考は、多岐におよびながらも、「起源に遡ることが、同時に未来（帰結）を考えることでもある。／未来（帰結）を探索することが、同時に起源を明らかにすることでもある」という思考の型が基盤にあるとすうえで、以下のよう述べる。

物理学においては原子という極微の世界の起源や構造を究めることが、同時に宇宙という極大の世界の構造や起源を解明することに直結している。しかし、だからこそ吉本は、この原子力Ⅱ「核」エネルギーの解放に、他のさまざまな科学技術上の発見とは次元の異なる「本質」的な意義を認めたいはずである。<sup>④</sup>

大井は、原子力Ⅱ「核」エネルギーの徹底的な解明によって、

世界や地球の根源や構造の確信に触れることができる。吉本が捉えていたとして、吉本の原発観を擁護する。そして、それは大井の独創ではなく、たとえば、大西巨人も「大地震に関連して意義のあるのは、地球の地震に関連する事態であり、吉本隆明はこの問題の発生以来その根本意義に触れてきた」<sup>5)</sup>、「吉本君が原子力発電の問題について、当初から、一概に肯定的であったのは、彼が地球の運命について、ただならぬ考えを持っていたからである」<sup>6)</sup>と述べており、原子力「核」エネルギーのさらなる解明のために、原子力発電開発を存続させようとする吉本の理念には、震災後にも一定の理解があると言つてよいだろう。なお『「反核」異論』では、吉本は以下のように述べている。

核兵器または核戦争としての「核」は、クラウゼヴィッツの古典的な『戦争論』によつてさえ、べつの手段による「政治」の問題にほかならないのだ。ところで「反原発」という場合の「核」は核エネルギーの利用開発の問題を本質とする。かりに「政治」がからんでくるばあいでも、あくまでも取扱い手段をめぐる政治的な闘争で、核エネルギーそのものにはたいする闘争ではない。核エネルギーの問題は、石油、石炭からは次元のすすんだ物質エネルギーを、科学が解放したことを問題の本質とする。政治闘争はこの科学の物質解放の意味を包括することはできない。既成左翼が「反原発」というときほとんどが、科学技術にたいする意識しない反動的な倫理を含んでいる。それだけではなく、「科学」と「政治」の混同を含んでいる。<sup>7)</sup>

原子力発電技術の本質は、「核エネルギーの利用開発の問題」なのであり、「石油、石炭からは次元のすすんだ物質エネルギーを、科学が解放したこと」が「問題の本質」なのである。政治の闘争によつてその「本質」に触れることはできないというのが、吉本の主張である。そして吉本はつづけて、「核」兵器や「核」戦争の問題は、どんな巨大な破壊力と放射能汚染をとまなおうと「政治の延長あるいはヴァリエーションとして」の「戦争」の問題であり、その巨大な生産費と生産量の問題は「経済社会」の生産機構の問題である。これにたいして「恐怖」の心情や「宗教」的な終末観をじかに対置させることも、「地球」の「破壊」という、神経症的な予測やイメージを対置させることもまったく見当外れなのだ」<sup>8)</sup>とも述べ、政治の問題あるいは経済の問題である核兵器や、あくまでも科学技術の問題である原子力発電技術について、地球の破壊を恐れる心情を対置させることは誤っていると主張する。つまり、核兵器は政治と経済の問題であり、原子力発電技術は原子力エネルギーの解放を目的とする科学技術の領域の問題であるのだから、別の文脈の問題を対置させることは間違っているというのが、吉本の思想なのである。

## 二、東日本大震災以後の原発推進言説と、吉本の原発観の類似性

前節では、東日本大震災後にも支持される吉本の反核理念批判の具体的中身が、反核理念は虚偽の思想であるという点と、政治や経済の問題である核兵器、科学技術の問題である原子力発電技

術に、地球の破壊という恐怖の心情を対置させるのは誤りであるという二点にあることを確認した。本節では、東日本大震災以後に吉本の上述した二点の主張を掛け合わせたような主張がみられることを確認し、そのような主張を批判するための問題設定を行いたい。それは、科学技術の進展は止めることができないうえに、止めるべきでもないのだから、反原発は望ましくないという言説である。たとえば、佐伯啓思は以下のように主張している。

技術文明そのものにわれわれはどうして反対できるのか、ということです。あるいは、ひとたび技術文明を認めれば、自動的にそれは原発まで行き着いてしまうのではないか、ということです。どこかに線を引くことができる決定的な理由は果たしてあるのでしょうか。<sup>9)</sup>

佐伯は、人間が技術文明に反対することは不可能なのだから、そうである以上、原発の開発にまで人間が手を出すことは必然であるとして、原子力発電が運用される現状を肯定する。そしてなぜ、技術文明に反対できないのかを、開発者の技術者の心情を根拠に述べようとしたのが、木田元である。

技術が一種の自己運動を起こし、技術者たちの前にありとあらゆる可能性が示され、任意のだけれが次々にそれを実現してゆくというプロセスが続いている（中略）たとえ一人が危険を予知して現実化を思いとどまっても、可能性が目の前に並べられているわけだから、すぐにだけれが現実化し

ます。（中略）人類は今や、技術の自己運動のしもべなのです。（中略）ありとあらゆる領域の技術が自己運動して肥大化し、これをコントロールしていると言えるような人間はもうだれもいません。<sup>10)</sup>

たとえ、危険を察知し技術の実現化を拒んだとしても、技術化の可能性がある以上、誰かが実現してしまうのだから、人間に技術文明の進展をとめることができないというのが木田の主張である。そしてさらに、佐伯・木田と同様の態度を示しつつ、原子力発電技術の開発を積極的に肯定する態度を示すのが、寺島実郎である。寺島は「我々は、原子力というこの『パンドラの箱』から遠ざかるべきなのか。それとも『箱』の前にとどまるべきだろうか。いずれを選択するかは、原子力、あるいは技術そのものへの態度を文明的に決断することにほかならない」と原発への態度が技術に対するそれと同じであることを、佐伯同様示した後に、以下のように述べる。

ここで留意すべきなのは、『パンドラの箱』が既に「開いている」ことだ。たとえ『箱』から遠ざかっても、ふたを閉じることができないのだ。そうであるならば、覚悟と根性をもって『箱』の前に踏みとどまり、原子力をより安全なものにすべく取り組むことが、現代に生きる我々にとつての責任の取り方ではないだろうか。<sup>11)</sup>

そして寺島は「福島事故も踏まえて、原子力の安全技術をさら

に高めていかなければならない」とつづける。寺島は原子力発電技術を使用し始めた以上、それをやめることはできないのだから、原発の安全性を高める努力を続けなければならないとし、原発の問題を技術文明の問題、とりわけ安全性のみに限定し、安全であれば稼働を問題視しない態度を形成している<sup>(12)</sup>。安全性が確保されれば原発の問題が解消するかのような言説は、当然批判される必要があるが、ここではまず、震災後にみられる原発の議論を技術の側面＝文明論のみに限定し、原子力発電技術の開発や利用を止めるべきではない、あるいは止めることはできないと、技術を肯定ないしは追認する態度が、これまでみてきたように吉本が『「反核」異論』で示したそれに根ざすようなものであったことを指摘しておきたい。上述した以外にも吉本は、鮎川信夫との対談で鮎川の「核兵器を作っちゃったということは既に原罪みたいなものなんだよ。人間が知っちゃったことは、核兵器を廃絶したところで知識としては存在し続けるんだよ。そういう点で知識というものの力をも軽く見てるね」という発言に、「知識や科学技術っていうものは元に戻すっていうことはできませんからね。どんなに退廃的であろうが否定はできないんですよ。だからそれ以上のものを作るとか、考え出すことしか超える道はないはずです<sup>(13)</sup>」と応えており、佐伯や木田、寺島が示したものに直接つながる態度をすでに示していたといえる。

そして、東日本大震災と福島の原発事故を受けても、吉本の考えは変わることがなかった。それは「動物にない人間だけの特性は前へ前へと発達すること。技術や頭脳は高度になることはあっても、元に戻ったり、退歩することはあり得ない。原発をやめて

しまえば新たな核技術もその成果も何もなくなってしまう。今のところ、事故を防ぐ技術を発達させるしかないと思います<sup>(14)</sup>」。「原発をやめる、という選択は考えられない。原子力の問題は、原理的には人間の皮膚や硬い物質を透過する放射線を産業利用するまでに科学が発達を遂げてしまった、という点にある。燃料としては桁違いにコストが安い、そのかわり、使い方を間違えると大変な危険を伴う。しかし、発達してしまった科学を、後戻りさせるといふ選択はあり得ない。それは、人類をやめる、というのと同じです<sup>(15)</sup>」などと、「人間」である以上、一度ははじめた科学技術の開発をやめることはあり得ないという態度を、原発事故後も貫いていることからいえる<sup>(16)</sup>。もちろん、吉本の主張に貼っている「人間中心主義」や、科学と技術の混同などの観点、川村湊が指摘するように<sup>(17)</sup>、戦後の思想の枠によって形成された「科学的オプティミズム」から脱出できなかったものとして批判することは可能であり、必要でもある<sup>(18)</sup>。しかし本稿では、吉本が原子力発電技術の開発・推進を肯定する論理を用いながら、むしろ吉本の論理通りの思考をするならば、原発を志向せざるを得ないのではないかと考えた、加藤典洋に注目したい。

加藤は「私自身が、三・一一の事故以前は、原発の問題にはさして大きな関心を向けていなかっただけでなく、その吉本の考え方に説得され、原発の主張には、どちらかといえば批判的だった。ここにいる私は、三・一一の事故によってある部分、反省し、沈思し、考えを変えた私なのである<sup>(19)</sup>」として、福島での原発事故以前は吉本の考えに同調していたが、震災を受け、吉本の考えをそのまま受け取るのではなく、ある部分を修正する必要がある

たことを述べている。そもそも震災直後から加藤は、「私は原発については、これを反科学の立場から反対するには、反対という考えである。想定される災厄にどこまでも備えることを条件に、科学が生み出した問題は、科学によつて解決していくのが正解という吉本隆明氏の考えに説得され、それを自分の立場としてきた。その考えはいまも変わらない」と吉本の原発観を受け取り、反科学の立場から原発に反対することには、震災後であっても、反対であると明確に述べている。では、震災を受けて、何を加藤は考え直そうとしたのか。加藤は吉本の原発観を「しかし、それはイデオロギーである。イデオロギーにすぎない。その観点と立場を維持するには、原発の有効性をささえる科学的基盤の検証、安全性に向けた自分の場所からの刻々のチェックが、日々必要だった」、「この惨事と失敗を教訓に、今後、原発と原子力エネルギーの問題をどう考えればよいか、根本的にどこまでも深く考え抜き、それへの対処をかたちとして示すことが、私たちの、また私の責務だろうと、思っている」としたうえで、以下の三点を根本的に考え抜くと、宣言している。

1 原発は、今後の日本社会の存続、また世界の未来にとつて不可欠なのか。資源、環境、人口、南北格差という地球の有限性の問題のなかで、ウランという地下資源に依存し、使用済み燃料の廃棄について汚染の問題を解決できていない原子力エネルギーが、どこまで、どのように有効な対策でありうるのか。

2 それが持続的には有効でない場合、では、代案はどう考

えられるか。もし、原発と原子力エネルギーを今後、太陽エネルギーに代表される各種代替エネルギーへの転換に向け、順次縮小し、やがて廃棄に持ちこむ移行策が妥当と考えられる場合、その現実的な展望とは、どのようなものか。そのために検討、考察されるべき項目とはどのようなものか。

3 これら、地球と社会の持続可能なありようをささえる、今後我々が模索すべきあり方、考え方、哲学とはどのようなものか。<sup>(1)</sup>

つまり加藤は、原発を科学的な視点のみでとらえるのではなく、今後の原発政策を考えるうえで、どのような考察すべき問題があるのかから考え、地球と社会を持続させるために必要な思想を「現実的」なものとして提示しようとして試みているといえる。その際、鍵となるもののひとつが、宣言のなかにもみられる「有限性」という概念である。

本稿では、まず次節にて、吉本の原発観を踏まえながら、原発事故を受けて、地球や人類の社会生活は永続するものではなく「有限」なのではないかという視点から、加藤が思索を展開した『人類が永遠に続くのではないとしたら』を検討し、資本主義の原理とは異なる「贈与」のシステムを構築することの重要性を確認したい。そして加藤が、原爆の被爆者もついていた「祈念」を鍵概念に考察を行った『3・11——死に神に突き飛ばされる』を検討し、過去の死者との関係性を考える加藤の思想の独自性を考察し、加藤が示した「贈与」のシステムと組み合わせ、脱原発へと至る方途のあり方を明らかにしたい。

### 三、自然的な過程を広義に捉えることによる脱原発への方途の提示——加藤典洋『人類が永遠に続くのではないとしたら』

本節では、加藤の『人類が永遠に続くのではないとしたら』（新潮社、二〇一四年六月）を検討していくが、四〇〇頁を超える大著のなかで、吉本の名前が登場するのは、中間の二〇〇頁を超えたあたりである。そのため、まずそこに至るまでの論旨を整理し、その後に、加藤が吉本の原発観をどのように更新しようと試みたのかを確認したい。

加藤は「このたびの原発事故にはこれまでにない新しい性格があるというのが、この事故が起こり、事態の推移を見ているうちに私にやってきた直観だ」（一二頁）と述べ、それは「事故にまつわる『責任』がそもそも「しっかりと取り切れる」ものではないこと」（二四頁）に由来すると、説明される。そして、福島第一原発の原子力保険が、本来であれば契約更新に際し保険料の値上げを通告してくる場面であるにもかかわらず、事故を受けて打ち切られたことから、原発事故は産業社会を構築する経済システムでは採算が合わないことを述べ、原発事故が、無限の成長への信頼が根底にあった産業社会によって回収することができないリスクを露呈させ、産業社会の有限性を露出させたことを主張する。そこから加藤は、「有限の世界のなかで、人はどのように生きるべきか」（四三頁）という問いを立て、レイチェル・カーソン『沈黙の春』やローマ・クラブ『成長の限界』など、これまでになされていた地球が有限であるという問題意識を、見田宗介『現代社

会の理論』などを踏まえながら検証する。そして、なぜ半世紀前から地球が有限であることは主張されていたにもかかわらず、一方ではそれを無視した産業の発展が目指され続けていたのかと疑問を呈し、それは「実際に困難が生じるまでは、なに、何とかなるだろう、まだしばらくは『消費社会、情報化社会』は安泰だろう、と思うだろう。（中略）人は、自分の暮らしに困難が及ぶとき、はじめてこれを除こうと立ちあがる。危機が内部的なものになると、それは人を動かす。そうでなければ、動かない」（九五頁）からだと言明し、地球の有限性が自分たちの社会の「外部」からやってくるものと捉えていたからだと言明する。

さらに加藤は、近代の本質にはどんな場合であれ否定されるべきではない、「私利私欲」とでもいうべき欲望の原初的なあり方があり、「私利私欲」を優先させる人物においても、有限性が問題として意識されるようなあり方で、要するに、産業社会の「外部」＝地球の有限性として有限性が主張されるだけでは不十分で、「どうすれば沈みかねない船の上で、人はパン（必要）だけでなく、幸福（歓喜と欲望）をめざす生を送ることができるだろうか」（一四〇頁）と問わなければならないことだと、さらにいえば、「人間の無限の可能性を追求しながら、その果てに有限性と出合い、有限な生と世界を肯定する、そうした新しい考え方に立つ思想」（一九九頁）を求めなければならないことだと、主張する。

そのうえで重要なのは、産業技術の大規模化、高度化、高速化をともなうことで、巨大過酷化した産業事故による成長の有限化を指摘するのみではなく、それを受けて「産業システムの側がどう対応するか」(二〇七頁)を考慮することだと、加藤は主張する。それは、つまり限界にぶつかり「ある種の破壊」が進行する一方で、同時に起こっている「意図的な方向転換、過ちの訂正、慎重な減速」を考えなければならぬ(二一四頁)ということだと、述べられる。ここまで述べたうえで、加藤は「人間の自然とのかわりをも、相互作用のうちにとらえる」吉本がマルクスから取り出した「自然史的な過程」とよばれる自然論Ⅱ人間論Ⅱ技術論に言及する。それは人間と自然の関係を「相互的で、人間は自然を人間化し、かつそのことの反作用によって、その活動を通じて自分自身が自然の一環へと組み入れられる」(二二二頁)ものごとからえる見方だと加藤は、説明する。つまり加藤は、近代の成長を駆動してきた「欲望」を否定するのではなく、むしろそれを追求することで、成長の限界に出会わせ、そのことを契機に、「欲望」を充足させるために無限の成長を求め続けた近代というシステムが組み替えられるさまを、吉本の「自然史的な過程」を用いて考えようとしているといえる。換言すれば、福島第一原発事故をもたらした近代産業社会を駆動した資本主義に基づく動機を否定するのではなく、事故を成長の限界点に到達した出来事とみなし、事故を受けて、近代産業社会がどのように変化していくか、その様子をとらえる必要性が述べられていると整理できるだろう。

しかし、これまで見てきた通り、「自然史的な過程」を基にした吉本の思考は、反・原発を主張するための論理であった。そ

の主張を捉えなおすため、まず加藤は吉本の主張を以下のように整理する。

私たちは、人類が原子力エネルギーを発見し、これを人間の力で作り出すようになったことを、同じく人間と自然・社会との間の相互交渉における不随意的・随意的な力能の「諸関係の所産」としてとらえることもできれば、個人と個人ないし人間集団との間の関係における倫理問題、責任問題としてとらえることもできる。しかし、前者の自然史的過程の観点が見るより重大だ。これを脱落させると、この問題を社会の総体と、吉本はいうのである。(中略)吉本は、このような考え方に立ち、原子力エネルギーの発明もその応用としての原発も、自然史的な過程としてみれば、否定できない大きな達成としての意味をもつ、という。原発問題の本質は、原発が科学技術に関する自然史的な過程の産物として生まれてきた点にある。自分はけっして原発促進論者ではないが、これを、誰かが不当に得をするのはけしからんとか、放射能は自然に反している、怖いから廃止しようとかという倫理的な理由で、原発を唱えるのには反対だ。これが自然史的な過程という考え方に立つ、吉本の反対理由だったのである。(二二七—二二八頁)

加藤は、自然史的な過程として原発をみたときに、原発を唱えることは適切ではないと吉本が考えていたと整理しているが、



ここで重要なのは、原発を自然史的な過程から考えるのは、吉本がそれを重要視していたとはいえず、ひとつの見方であって、別の見方から原発を捉えることもできると、加藤が捉えている点である。そこから、原発問題の本質を加藤は以下のように記述する。

原発には人類の叡智の最高の達成が体现されている。と同時に、事故のリスクが大きく、非人間的な危険な労働にささえられ、使用済み燃料の処理方法をもたない危険きわまりない存在だ。そういう二つの言明が、ともに可能であり、この二つの意味を重層させているところに私たちにとつての原発問題の本質がある。(二三五頁)

そのため、原発を考える際に、政治社会的な含意や産業や市場の観点を、それが「人類の技術と文明における自然史的な過程上の意義を前にしては、経済的な利益追求、損失忌避といった動因は、二義的なものにすぎない」(二四三頁)ののだとしても、脱落させるのは、考察の幅が決定的に狭いのではないかと考えるようになったと、加藤は述べる。さらに、そもそも吉本の自然史的な過程とは「いったんその見方に立つと、ここでは都市と田園と自然がともに人間の活動の一環の同一線上に現れ、科学技術上の進歩、学問的真理の追究という高尚な知的関心と、利己的な人間の利害追求という自然で通俗な欲求とが、同位の「力能」として脱倫理的なフィードバック系に現れてくる考え方」のはずであり、そうであるならば「それが儲けにならぬという経済的な理由も、使用済核燃料の廃棄先が原理的に見つからないという事実認識の

もと、想定外の事故によっていよいよ高まるだろう人々の不安も、新しい外部からの『入力』としては、科学技術の進歩、あるいは資源枯渇の不安と、同じ資格をもっている」(二四四頁)と加藤は述べ、「市場、生産、産業から、経済、社会的な要因までを含み込んだ広義の自然史的な過程」の観点からすれば、「このたびの原発事故は、優に、原発への評価を変えさせる条件を満たしている。なぜなら、それは、原発が実は、経済効率的にも——事故の絶対的安全性を担保できない限り——人類に真獻できないこと、軍事的な側面を取り払えない以上、少なくとも日本では秘密主義を免れず、その絶対的な安全性が担保できないだろうこと、また、核廃棄物の処理の方法をいまだ人類が見つけ出せていないことの意味が、これまで考えられてきた以上に重大であることを、稼働以来六〇余年で三度という高い発生率を通じて示しているからである」(二四五頁)と、主張する。

つまり加藤は、吉本の自然史的な過程の考え方が、原発の問題を考える際に限り、科学的側面のみが重要視され、他の要素が副次的なものとして価値を認められていないことに疑問を呈し、スリーマイル、チェルノブイリ、福島と、過酷な原発事故が六〇年で三回も起きている以上、原発がもつ科学的側面以外のさまざまな要素の意味を重大視し、自然史的な過程のなかに含み込む必要性を提起し、吉本の原発観の更新を試み、脱原発へ至る道筋を示しているといえる。そしてここには、瀬尾育生が述べていたような「倫理的な負荷」によって脱原発に向っているという批判にはあたらぬ思考の道筋が示されている。原発が開発され、そこで事故が起こり、原発に関係するさまざまな要因がもつ意味が重大

であることに気がつき、脱原発へと向かうという過程が、自然史的なものとして捉えられるとき、それらの要因は倫理的な観点からなされる配慮ではなく、考慮すべきひとつの「入力」となり、それらの「入力」に考慮したうえで、脱原発へと至るのは「自然」＝必然的な結論であるからだ。また、原発の科学的な側面以外の「入力」における意味が重大なために、脱原発へといたるのは、科学的な側面を軽視しているわけではなく、脱原発へと至る過程では高度な廃炉技術が必要となるため、むしろ科学的な側面は重視されているといえるだろう。ただそれが、原発の存続とは異なる形で出力されるということである。

#### 四、「贈与」の思想の限界

前節で述べたように、吉本の自然史的な過程の捉え方を加藤は拡張し、脱原発へと至る道筋を示したが、全く問題がないわけではない。それは、前述した道筋で脱原発に至るためには、世界あるいは日本社会の民意が、福島での原発事故を受けて、その意味を適切に考慮し、脱原発へと舵を切る意思を示すことがなければならぬという点である。

加藤は前述した内容に続け、第三次産業革命の中心であった原子力技術と宇宙科学という大規模かつ高度な産業が、巨大技術ゆえの事故発生時のリスクの大きさや、地球の有限性という壁にぶつかったことにより成長が頭打ちになり、九〇年代以降、資源もエネルギーもさして使わず、環境への負荷をほとんどもたない通信情報産業が、自然的な過程の必然として、有限の時代に応答

するように、中心化してきたことをまず指摘する。そして、リーナス・トーバルズが、自らが開発したリナックスを一般に無償で公開したことに着想を得て、行動に対する見返りがなくてもよいが、こなくともよいと考える「贈与」の思想が、有限の時代の新しい関係性を構築するうえで重要な力能になると述べている。確かに加藤が資本主義のシステムから外れる一方的な「贈与」に可能性を見出しているのは、適切であるように思われる。なぜなら、佐藤嘉幸・田口卓臣が指摘するように、原発の稼働を続ける社会から抜け出すためには、資本主義の原理から外れる必要があるからだ。

国家と資本のシステムは、今後も、「経済成長の原動力」として原発を活用し続けようとするだろう。そのとき私たちが想起しなければならないのは、人間的生とはこうした「経済成長」のための「手段」でも、自己目的化した技術のための「手段」でもなく、あくまでも「目的」であるべきだ、という点である。(中略) この意味で、私たちが求める脱原発を実現するためには、人間的生を、自己目的化した技術あるいは経済成長のための「手段」として捉えるのではなく、「目的」として捉え直す視点が不可欠となる。<sup>(2)</sup>

人間にとって豊かな生を実現するための、単なる「手段」ではないはずの原発が、経済成長を名目に稼働し続けることを「目的」化し、人間の生が原発を稼働するための「手段」になるといふ転倒が起こっている現状を打開していくためには、人間の生を

再度「目的」として据える視座が必要と、佐藤・田口は述べる。その際に必要なのは、稼働の名目である経済成長の重要性を二次的なものとするのである。加藤はそのことを「することもしないこともできる」という表現で示そうとする。

やがて「できない」ことに對して「することができ」力を対置することへの息苦しさが、とくに若い人々を中心に広まってきた。それに代わって、「することもしないこともできない」力、「してもよいがしなくともよい」というコンテンツジェントな自由なあり方、「しないことができる」力を喜ぶ感性和価値観が浮上してきたが、これも広くいえば「できないこと」との私たちの出会いと向き合いから生まれてきたのだ。／そのむこうには、購買と消費自体からすら離れ、購買と消費を「することもしないこともできる」力、「してもよいがしなくともよい」という自由、また「しないことができる」力への指向すら、現れてきている。(中略)今日、私たちはあまり宇宙のことは考えない。人類は月までで行った。火星は無理だろう、いやことによれば、火星までなら行けるかも、そんな程度に思っている。でも、驚くべきは、そのことを私たちが必ずしも否定的に感じていないということではないだろうか。(三七二―三七六頁)

地球の有限性にぶつかつた自然史的な過程のなかで、経済成長や科学技術の進展を至上におくのではなく、発展させることも、発展させないこともできるという「自由」を謳歌する方向が、新

たに打ち出されていると加藤は指摘し、その方向が、有限の時代を生きた人間の生のあり方であるとして可能性をみている。それ自体もまた、適切な思考であるといえるが、問題はどのような自由を謳歌する方向性が全面化されるかどうかである。佐藤・田口は「脱被曝と脱原発という二つの理念の実現と、その実現に向けた社会システムの変革について、具体的な提案を行う」<sup>(23)</sup>として、二〇一四年の世論調査で国民の多くが脱原発に賛成している調査を示し、「代表制民主主義と官僚機構が国家と資本の論理に依拠して中央集権的に統治する」現行の民主主義に代わり、「現在の代表制民主主義に可能な限り直接民主主義的要素を導入するために、国民の発議で法的拘束力を持つた国民投票を実施できるという、国民投票の導入」を提案している<sup>(24)</sup>。ただしその場合問題になるのは、『朝日新聞』の二〇一一年四月一六―一七日の調査を基に大澤真幸が、『原発やめる』と『減らす』を合わせて四一％(うち『やめる』は一―％)であり、これは、『現状程度』と『原発増やす』を合計した広義の原発支持派五六％よりも少ない<sup>(25)</sup>と指摘するように、脱原発を支持する割合には時期によって幅があり、必ずしも脱原発支持が大勢を占めるわけではないということである。もちろん、加藤の「してもよいがしなくともよい」という動きも同様で、現状でその動きが全面化しているわけではない、このまま自然史的な過程に任せて、脱原発へと向かっていくとは考えにくい。

そこで、加藤が震災直後に発表した『3・11―死に神に突き飛ばされる』(岩波書店、二〇一一年一月)を検討したい。次章では、ここまでに加藤が示した自然史的な過程のなかに、『3・

11』で加藤が示した「被爆者の祈念」というものを組み込み考察を行ってみたい。加藤が示した「贈与」と「被爆者の祈念」を重ねること、脱原発へと至る方途への考察を最後に行ってみたい。

## 五、被爆者の祈念への贈与

### ——加藤典洋『3・11——死に神に突き飛ばされる』

加藤は『3・11』においても、先述したように、吉本隆明の反・原発の考え方である「情緒的な原発には反対」という立場を保持し続け、原発事故まで「科学的達成を推し進めるに際し、社会と接点を持つところには、必ず正義や社会的なことや文化の問題が入ってくるのですが、そこでいろいろなものをチェックし続けたうえで右の吉本さんの命題を受け取るべきだったところ、それを怠ってきた」（三五頁）と告白し、その反省から思考を開始している。加藤は「私たちは『原爆を経験した』から、『原子力エネルギーの平和利用』と謳われていた原発に「夢を託すようになったのではなかっただろうか」（二〇二頁）としたうえで、「もし被爆した人々、そして戦後の日本人が、『原爆を経験した』からこそ『原子力エネルギーの平和利用』に夢を託すようになったのだとすれば、その理由はどのようなものだったのだろうか」（一〇四頁）と問いを設定する。そして、田中利幸が提示した「原子力という『破壊と死滅』の破壊力の犠牲になり、またその暴虐にさらされた人々が、これを人類の未来の『幸福』と『繁栄』の力へと反転させたいという希望、祈念を持った」という観点と、「一九五三年にはじまった米国の『アトムズ・フォー・ピース』（原

子力平和利用）政策に基づく米国主導の被爆者籠絡、また、世論操作活動の深刻な影響と効果が認められる」という観点（一〇四頁）を参照する。しかし加藤は、田中の二点目の観点には反論を試みる。

被爆者たちの一部の人々は（中略）「核兵器は死滅につながるが、原子力は生命につながる」という祈念を持つように宣伝工作に騙されたのではなく、そのような祈念を持っていたため、その祈念に、つけこまれ、米国主導の核戦略の一環である平和利用のかたちへと、領導されてしまったのではないだろうか。／もう少し言えば、被爆者たちの、「核兵器は死滅につながるが、原子力は生命につながる」は、福島原発の事故が起こったいまの事後の目から振り返ると、悲しいほど紋切り型の「二律背反論」と見えるのだが、これらの人々が原爆を被爆した、その言語を絶する経験をしたという原点としての事実だけに立つ、いわば事後でない目——事後の視界を取り去った目——でこれに対するなら、この祈念のかたちには、権利があるというべきなのではないだろうか。（一〇九頁）

現在の視点から見れば、被爆者は米国主導の原子力平和利用の喧伝に籠絡されたように見えるが、現在の視点から考えるのではなく、被爆者が原爆に被爆した地点に立つて考えるとき、「原子力は生命につながる」という祈念は、米国の世論操作による産物という評価では退けられない「権利」があるのではないかと加藤

は述べる。それはどのような「権利」か。加藤は原爆という「悪」が「人道に対する罪」と呼ばれつつも、「その罪科のもとにこれをもたらした者を処罰するにはいた」っていいことを述べ、適切な正義が実現されないことを被爆者がどのように耐え忍んでいたかを、以下のように考察する。

私は、このような場所で、理念的に言うなら、被爆した人々の心の底に、次のような願い、祈念が現れたとしても、その祈念のかたちには、権利があるだろう、と思う。私たちが、彼らをそう考えるほかない場所に追いやっている限りで、彼らには権利があり、私たちには責任があるのである。もしこの核の「悪」に対し、人類が、私たちが、これを「平和利用」することで、「原子力の平和利用」を対置することができるとしたら、どうか。それを柱に、被爆者の医療体制の完備、やがては原爆の完全廃止までしっかりと事態を進められるなら、はじめて、犠牲者の霊も、少しは浮かばれるのではないか。その意味で、自分は「原子力の平和利用」の実現を——被爆者の救済、原爆の廃止とともに——希求する。／このような「祈念のかたち」が生まれたとしても、それは、不思議ではない（一一二—一一三頁）

加藤は、二度も核兵器によって被爆しておきながら、正義を実現することができなかったために、「核の平和利用」に希望を見出さなければならなかった被爆者の祈念には「権利」があり、その「権利」を果たす「責任」が、現在を生きる我々にはあるのだ

と述べる。そしてその時に必要なのは、「どうすることが、原爆で死んだ人々の思いに少しでも答えることができることかと、そのことを、ものを考える基準にすえることであ」（一一〇頁）り、その際には、原発の平和利用がいつでも軍事使用に転用できる「核燃料サイクル」が問題になるため、これを廃棄することが、必須の条件になることをまず指摘する。なぜ問題になるかといえば、「核燃料サイクルの確立は、それだけで軍事的目的を叶えてしまうという構造」があるため、国是に反してしまい、「国是に反する部分を国民の目から隠さなければならなくな」り、「国の原子力政策は、大きく、深く、民主主義の原則から逸脱する」こととなってしまうからである。「日本の原子力の平和利用が、方法を違えていれば、被爆者たちの祈念のかたちに近づくことも、万が一には可能であったかもしれないのに」もかわらず、核燃料サイクルの確立を目論んだばかりに、日本の原子力行政は秘密主義を生んでしまったのである（一一三—一一三頁）。そして、加藤は以下のように結論づける。

今回の原発事故の最大の原因は、日本がほんとうの意味で「原子力の平和利用」を確立できなかったからだというのが、世界に向けての日本としての反省でなければならぬ。（中略）  
私たちは、「原子力の平和利用」に換え、「原子力平和利用に代わる有効なエネルギー開発を、国家レベルで追及」するという目標を置いてもよい。そう、それが、被爆した人々の、あの決して誰からも否定されるべきではない、「原子力平和利用」に向けられた祈念のかたちの、原発事故以後の、受け

皿、更新のかたちかもしれないからである。(一六〇—一六一頁)

まとめれば、加藤は、原爆を経験した日本社会が原子力の「平和利用」を受容した理由を「正義」が果たされず、不正義を耐えなければならぬ被爆者が、核の「悪」に対して「平和利用」への祈念を対置させることで克服しようとしたという観点から説明を行い、そのような被爆者の祈念に込めるようなかたちで、「平和利用」が行われていなかったことが、原発事故後によって明らかになった現在、核燃料サイクルを外した字義通りの原発の平和利用を迫及するか、「原子力の平和利用に代わる有効なエネルギー開発」を追求するかの二択でしか、被爆者の祈念には込えられないと考えているといえる。しかし、実際には事故後にも「原子力業界、原子力をめぐる政官学財『複合体』、原発推進論者にひとしなみに見られる反省のなさ」ゆえに、祈念に込えられる可能性はないと考える加藤は、「私たちは、脱原発に進むのがよいと思う」という結論に至る(一五五—一五六頁)。

つまり、加藤は、ここで一方的に被爆者の祈念に込える「贈与」を行う必要性を述べているといえるだろう。そして、先の議論に接続すれば、被爆者の祈念によって「原子力の平和利用」が開始されたが、事故後、それに込えられないことがわかり、原発の利用を断念するという思考は、被爆者の祈念を一要因として広義の自然的な過程に組み込んで考えたものともいえるだろう。さらに、加藤がこのような発想を行う背景には、吉本の「史観の拡張」の発想があるようにも思われる。加藤は『アフリカの段階について』

て』の副題が「史観の拡張」であることに触れ、この歴史観の「拡張」は、「初原の繰りこみでありつつ、過去を取りこむことと未来を繰りいれることが同時的かつ同じ方法によるものと観念されている」と指摘する<sup>(56)</sup>。つまり、日本における福島原発事故以後の、未来の原子力政策を考えることと、被爆者がかつて「原子力の平和利用」に託していた祈念を考えることは同義であると、少なくとも加藤の「史観の拡張」の解釈からは述べることができよう。そのように考えれば、被爆者の祈念に「一方的に『贈与』」することは、瀬尾が述べるような「倫理的な負荷」ではなく、未来を考えるために広義の自然的な過程に「入力」された、被爆者の祈念という要因による必然的な行為とみなすことが可能になるはずである。東日本大震災以後の原発政策を考える際に、二度の原爆による被爆者の祈念を考察し、そこに「贈与」する必要性から、脱原発へと進むことを選択する加藤の思想は、吉本隆明の原発観をはじめとした思想の読み直しによってなされているといえるのである。

## 六、おわりに

本稿では、まず東日本大震災後に吉本隆明の原発観を支持する言説や、吉本の主張に類似する言説を確認し、吉本の原発観を読み直すことが、震災後の原発推進論者の言説を検討するうえで有益であることを指摘した。そのうえで、吉本の原発観を更新しようとして試みていた加藤典洋の『人類が永遠に続くのではない』と『3・11——死に神に突き飛ばされる』を検証し、「原

子力の平和利用」に核の「悪」の克服を託した、被爆者の祈念に照らして、現行の原発政策がその祈念に込められていないことから、脱原発へと向かうことを提言する加藤の思想を、被爆者の祈念に贈与する思想として評価した。そして、加藤の思想の根底には「過去を取りこむことと未来を繰りいれることが同時的かつ同じ方法によるものと観念され」る、吉本の「史観の拡張」の発想があることを指摘し、原発観を含んだ吉本の思想の読み直しによって、加藤の思想が編まれていることを確認した。

そしてここで最後に、もう一点、加藤が吉本の思想を読み替えている可能性があることを指摘しておきたい。それは被爆者への態度である。『「反核」異論』には、吉本が、中上健次の「鴉」というテクストを掲載した『群像』に「ヒロシマ・ナガサキ」の死者を冒瀆するものであると抗議し、謝罪を要求した栗原貞子に対して、以下のように述べている箇所がある。

平穏な日常生活のなかで脳卒中の後遺症に苦しむ人も、老衰による自然死も、「ヒロシマ・ナガサキ」の被爆者の後遺症や、その死とまったく同等であり、「世界の反核運動に立ち上がった民衆」も、そんなものにならざるに立ちあがらずに平穏な日常生活をその日その日なんとなくすごしている民衆も同等である、と。<sup>(7)</sup>

脳卒中や老衰や被爆の後遺症で苦しむ人も、またそれによって亡くなった人も、すべて「同等」なのであり、被爆者のみを特権化するような思想は誤っているとする吉本の考えは、確かに間違

っていないように思う。しかし、それは被爆者を顧みなくてもよいということでは、もちろんない。特に原発という「核の平和利用」という傘を着た原発と同根の施設の再稼働、開発をめぐる議論のなかで、それを参照しなくてもよいということには当然ならない。吉本が、東日本大震災後に語った原発観からも、「今回の大震災は、日本社会がますます消費産業化し、それから生じる特有の問題に本格的に取り組まなければならない時期に過ぎました。政府や資本家は特にそのことを認識して、これからの舵取りをするべきです。そうしないと、経済的な復興を急ぐあまりに労働時間は長い、低賃金しか得られない人々にしわ寄せがいく可能性があります。そうなれば、被災地にも大勢いる、そのような人々の精神状態をさらに悪化させかねません」<sup>(28)</sup>と、低賃金労働に追い込まれている人々や、被災地で生活する人への目配りはありながらも、過去の被爆者への言及はない。加藤は、吉本の「史観の拡張」という思考のあり方を用いながら、吉本の被爆者への目配りのなさを克服する読み替えをしていたのではないだろうか。過去を考えることが未来を考えることと同義であるならば、被爆者への目配りは欠かすことができないからである。東日本大震災後に修正が必要な部分を更新しながらも、思考の根本に吉本の思想を据えている加藤の思想は、東日本大震災以後に吉本を読み直すうえで、重要な示唆を与えるものであることを、改めて強調しておきたい。

## 注

1 瀬尾育生『吉本隆明の言葉と「望みなきとき」のわたしたち』言

- 視舎、二〇一二年九月、四一頁
- 2 吉本隆明「停滞論」『「反核」異論』深夜叢書社、一九八二年二月、一四―一五頁
- 3 注2に同じ、一〇―一一頁
- 4 大井浩一『批評の熱度——体験的吉本隆明論』勁草書房、二〇一七年一月、五三頁
- 5 大西巨人「吉本隆明の死に関連して」『KADOKAWA夢ムック 文藝別冊 さようなら吉本隆明』二〇一二年五月、五一頁
- 6 大西巨人「人間の本義における運命について」『現代思想 総特集 吉本隆明の思想』第四〇巻八号、二〇一二年六月、八頁
- 7 吉本隆明「「反核」運動の思想批判」『「反核」異論』、四六―四七頁
- 8 注7に同じ、四九頁
- 9 佐伯啓思「反・幸福論」新潮新書、二〇一二年一月、二〇九頁
- 10 木田元「技術文明の自壊」『新潮45』二〇一一年六月号、三二頁
- 11 寺島実郎「原子力の平和利用に徹してきた唯一の国日本の責務」『GLOBAL EDGE』二〇一一年 Summer号、五頁
- 12 原発の稼動についての論議を安全性のみに限定して展開する態度は、立花隆にもみられ、立花は「核をアプリオリに邪悪なものとする人々は、核は人間にコントロール不可能なものと思いこんでいる。フクシマがそれを証明したと思っている。しかし、現代の最先端の原発（いま第三世代半までできている）では決して起りえないことがすぐわかる。いまの原発では、フクシマの悲劇の最大のものになった水素爆発が絶対に起らない（中略）フクシマの悲劇をもたらした全電源喪失メルトダウンも絶対起らない」と述べ、現在稼動する最

- 新型の原発は「安全」であるとして、原発の稼動に賛同している。  
（立花隆「写真で見るヒロシマ・ナガサキ、原発と原爆」『週刊文春』二〇一一年九月一日、一二三頁）
- 13 吉本隆明「崩壊の検証（討議 鮎川信夫）——「反核」をめぐる〈戦後〉理念の終焉」『「反核」異論』、二四二頁
- 14 吉本隆明「科学技術に退歩はない」『「反原発」異論』論創社、二〇一五年一月、五七頁
- 15 吉本隆明「科学に後戻りはない」『「反原発」異論』、一一四頁
- 16 なお「「反核」異論」から震災が起こる前のあいだにおいても吉本は、「技術はどういうふうによっても人為的にはとめられないということですね。／＼つまり、人間の知的な好奇心や知的な成果は後戻りすることはあり得ないということは、一種歴史の公理みたいなものだと思っています。それをとめようとしたり、逆戻りさせようとするというのは、それ自体が間違いだらうということは、非常にはっきりしていると思っています」と同様の態度を示しており、原子力発電術に対する態度は一貫している。（吉本隆明「原子力・環境・言葉」『原子力文化』日本原子力文化振興財団、一九九四年一〇月。引用は、吉本隆明『「反原発」異論』論創社、二五〇頁）
- 17 川村湊『原発と原爆』河出書房新社、二〇一一年八月、七六―七七頁
- 18 『「反核」異論』の発表以後、吉本の原発観を一貫して批判し続けている論者に土井淑平がおり、土井の『反核・反原発・エコロジ―』吉本隆明の政治思想批判』批評社、一九八六年二月、『知の虚人・吉本隆明——戦後思想の総決算』編集工房朔、二〇一三年一月などの著作に詳しい。



- 19 加藤典洋『人類が永遠に続くのではないとしたら』新潮社、二〇一四年六月、二三四頁
- 20 加藤典洋『3・11——死に神に突き飛ばされる』岩波書店、二〇一一年一月、二二頁
- 21 注20に同じ、二二―二三頁
- 22 佐藤嘉幸・田口卓臣『脱原発の哲学』人文書院、二〇一六年二月、八七―八八頁
- 23 注22に同じ、二三頁
- 24 注22に同じ、四四―四四五頁
- 25 大澤真幸『夢よりも深い覚醒へ——3・11後の哲学』岩波書店、二〇一二年三月、一〇七頁
- 26 注19に同じ、三五六頁
- 27 注7に同じ、三〇頁
- 28 吉本隆明「精神の傷の治癒が最も重要だ」『「反原発」異論』論創者、二〇一五年一月、二一―二二頁